

安倍川の瀬切れ

柴 正博・村松茜弥・大村優香



図1 安倍川橋付近から上流の瀬切れ。水のない河床が広がっています（2026年2月8日）。

安倍川水系では、昨年（2025年）の9月～11月の累計雨量（戸持雨量観測所）が、平年の69%程度にとどまり、安倍川水系では渇水傾向が続いていました。そうした中、11月28日に安倍川の安西橋下流（河口から5.6 km 付近）で約50 m程度の瀬切れが確認され、12月1日にはそれが約300 m程度に拡大し、さらに狩野橋下流（河口から9.0 km 付近）でも約300 m程度の新たな瀬切れが確認されました。

「瀬切れ」とは、河川を流れる水の量が減り、水面幅がだんだん狭くなっていき、ある時点で水深の浅い瀬が干上がって川の流れが途切れることをいいます（図1）。一年を通して雨の多い日本では、一部の地域を除いて瀬切れはそれほど頻繁には起きません。安倍川では昭和59（1984）年11月の渇水時に瀬切れが起り、それ以降平成6（1994）年度、平成9（1997）年度、平成11（1999）年度、平成12（2000）年度に確認され、平成20（2008）

年度から平成30（2018）年度までは2～3年に1回程度5日～40日程度瀬切れ発生し、令和3（2021）年度からは毎年20日以上、令和6（2024）年度にはそれが70日に及びました（図2）。今年度（2025年11月～2026年2月末）は瀬切れが80日間続き、3月まで継続すると100日を超えると考えられ、瀬切れの継続距離も長くなっています。

2026年2月8日と10日に私たちが調査したところ、安倍川の瀬切れの最北部は足久保川の合流地点より上流側の新東名高速道路の新安倍川橋の上流（門屋）付近（図3）にあり、最南端は国道150号線の南安倍川橋（中島）の右岸側、もう数百mで河口というところから水域が発生しているのを確認しました。その間の距離は12 km以上で、河床には支流河川からの水域が一部あるものの、まったく水のない河床が広がっていました（図4）。

瀬切れの原因の最大の要因は、静岡市周辺

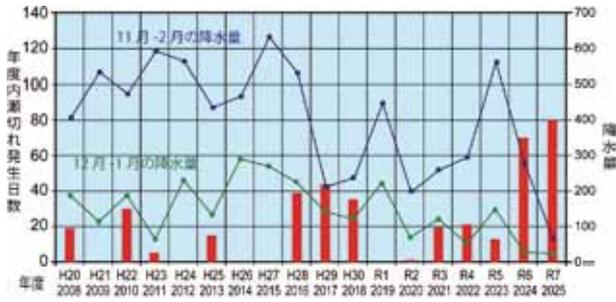


図2 年度別の瀬切れ発生日数と冬季の降水量の関係。



図3 新東名高速道路の新安倍川橋（河口から約13 km）の上流の門屋付近で河川が途切れて、下流側で瀬切れが発生している（2026年2月10日）。

の11月から冬季の降水量が少ないこと（図2）と、安倍川が典型的な扇状地の河川で、河床が砂や砂利できているため水量が減ると表面を流れる水がすぐに地下（伏流水）に潜ってしまい、地表の川が途切れる瀬切れが発生しやすくなります。また、近年、安倍川河床が急激に上昇していて、河口から19 km（牛妻の曙橋が河口より17 km）より下流で平均0.3m、最大1.1m上昇しています（河口から19 kmより上流部では現在も河床が低下しています）。そのため、水はさらに伏流水になりやすく、河床に水がない状態になり、瀬切れが長期化し、その範囲も長距離化する傾向にあります。

現在、安倍川の河床では、河床を低くするために掘削採石が行われていますが、河床はまだ相当に高い状態にあります。また、安倍川の河口からの礫の供給不足のための海岸侵食も続いていて、採石はその補充の養浜にも使用されています。今後、安倍川とその海岸の保全のために、さらに長期的また計画的な河川管理が望まれます。



図4 安倍川河口から門屋まで続く瀬切れ。黒色部が水域で、それ以外は水のない河床。（2026年2月10日）